

## 国立民族学博物館の収藏品⑤

# 明治期収集のアイヌ資料

一昨年、本連載の一・二回目に寄稿したときは、「アイヌの文化」展示場がリニューアル・オープンしたばかりだったので、新しく収集した資料を中心に紹介した。そこで、今回は古い資料を取り上げてみたい。

一九七四年に創設された当館は、開館に向けて資料収集を行った。しかし、多くの地域と同様に、すでにアイヌの生活様式は大きく変化した後で、伝統的な民具を集めるのは簡単なことではなかった。そのため、北海道内の古老たちにかつての生活用具の製作を依頼したり、古民具の収集家から購入したりして展示資料を集めた。

だが、当館が所蔵する資料は、設置後に収集されたものばかりではない。本連載でもいくつかの古いコレクションが紹介されてきたところだが、当館で最も古いアイヌの資料が含まれるのは、東京大学理学部人類学教室の旧蔵品である。東大旧蔵の民族学関連資料は六〇〇



写真1 平取で製作された盆 (標本資料番号K0002158)



写真2 1884年以前に収集された鉢巻 (標本資料番号K0002270)

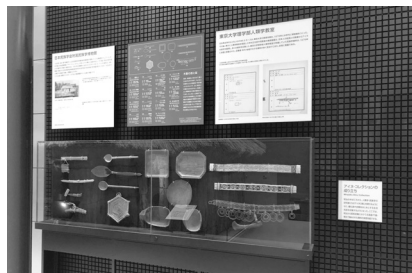


写真3 東大人類学教室と日本民族学会附属民族学博物館 (1937-1962) 旧蔵のアイヌ資料を紹介する展示コーナー

点あまり、その大部分が明治中期から昭和初期に収集されたもので、当館には一九七五年に移管された。海外の資料は、台湾やミクロネシア(南洋群島)などで日本統治時代に収集されたものが多い。アイヌの資料も、北海道のみならず、戦前に樺太や千島で集められたものがある。

そのなかでも最古と判明しているのは、大森貝塚の発掘で知られるE・S・モースの指導により一八八〇(明治十三)年に開場した東京大学理学部博物館の所蔵品である。そこには、地質や動物・植物などの標本とともに人類学や考古学関連の資料も展示されており、一八八四年に出版された英語のカタログには約九〇点のアイヌ資料のリストがある。このうち約半数は当館に所蔵されていることが確認でき、広い区分ではあるがSapporo-ken (札幌県)やNemuro-ken (根室県)など収集地と思われる地名がわかった。なお、北海道が三県に分かれていたのは一八八二年から八六年までである。これらは、研究者が収集したアイヌの資料として最も古いものに位置づけられる。

一八九三(明治二十六)年には、同大に日本初の人類学講座が設けられ、以降は人類学関連の資料が増えていった。たとえば、写真1の木製の盆の裏面には、平取村(現・平取町)のアイヌによる製作であることとともに「濱尾総長寄贈」と書かれた紙が貼り付けられている。一八九三―九七年と一九〇五―一二年の二度、東京大学(帝国大学時代含む)の総長を務めた濱尾新のことである。二年ほど前に平取町二風谷の木彫家らが来館して、この盆を含む木彫品を調査したのだが、一〇〇年以上前の彫刻技術の高さやバランスよく配置された文様に感心していた。

展示場では「どうやってこれらの資料を集めたのか」という質問をよく受ける。「アイヌをだまして持ち帰ったのか」と言われることもある。当館設置以前の収集資料は付随する情報が限られてはいるが、それらの問いに答えるべく調査を進め、展示やデータベースで収集の経緯をも示していきたいと考えている。

(齋藤玲子)